



かどかわ そういち 角川 総一

金融データベース代表。著書に『投資スキルアップ講座』(日本経済新聞社)、『経済の動きが手にとるように見える』(中経出版)、『日本経済新聞の歩き方』(ビジネス教育出版社)など。

図3 再び過去最高値を更新する勢いの国際商品指数

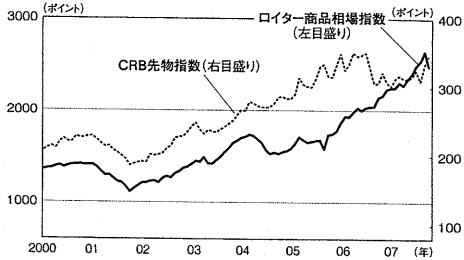


図2 上昇ピッチが加速する国際穀物市場

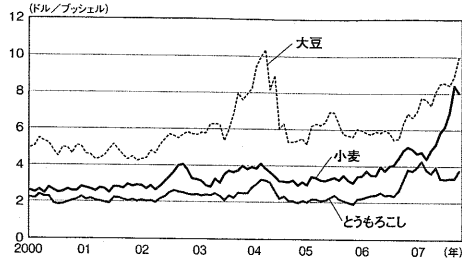


表1 主なコモディティファンド一覧

Table with columns: ファンド名, 会社名, 当初設定日, 純資産, 騰落率 (3ヶ月, 6ヶ月, 1年, 2年, 3年, 5年). Lists various commodity funds like 野村コモディティ投資, AIG コモディティファンド, etc.

表2 主な資源・エネルギー関連ファンド一覧

Table with columns: ファンド名, 会社名, 当初設定日, 純資産, 騰落率 (3ヶ月, 6ヶ月, 1年, 2年, 3年, 5年). Lists resource and energy funds like HSBC 世界資源エネルギーオープン, フラックロック・ワールド資源株ファンド, etc.

(注)ファンド名は一部略してある

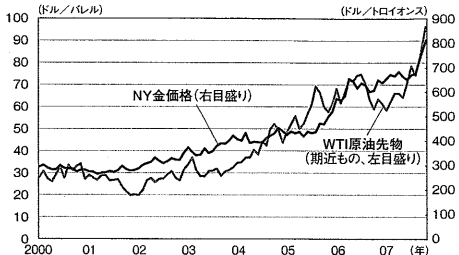
通貨の対円レートの動きが加味されているが、この影響を差し引いても以上のようなパフォーマンスの差はほぼ恒常的に認められる。これはおそらく次のような事情による。すなわち、商品市況が高騰する際にはそれらの商品を取り扱う企業の株価上昇ピッチの方が速い。これは、ある種のレバレッジ効果が生じている可能性がある。

コモディティは

ミドルリスク・ミドルリターン

最も単純に原油の掘削会社を想定してみる。彼らにとって、これらの素原料を生産するのに要するコストはほとんど変化しないはずだ。にもかかわらずその売値がたとえ20%上がれば、当該企業の利益はプラス20%ではとまらないはずだ。

図1 再び騰勢トレンドに入った原油と金価格



短期的には8月に一気に顕在化し 実物資産へ 投資資金はヘバーマナーから

では、こうした外部環境のトレンドがこれからも期待されるとすれば、こういった視点から投資信託を選択するのがいいだろうか。

今回は「コモディティ(商品)」「資源」「エネルギー」という3つのキーワードで個別ファンドのパフォーマンスをチェックしてみることとする。いずれもいつでも自由に購入可能な追加型株式投資を対象とした。

10月以降、国際商品市況の上昇ピッチが急だ。11月初旬には、ニューヨーク・カンタイル取引所でWTI 1期近ものが1ドル当たり初めて96ドルを突破、金の先物も28年ぶりに1台800ドル台に乗せた(図1)。

た米サブプライムローン問題により国際レバールでの投資、投資資金がこぞってヘバーマナーから実物資産へシフトしたことが大きい。しかし、その背景を形づくっているのは、新興国の急速な工業化による素原料の需給逼迫であり、中東情勢の不安定化であり、米国を中心とした先進国の金利引き上げ一巡からくる金融商品の魅力の相対的な劣化だ。さらには米ドルが円以外のほとんどの通貨に対して売られていることから、ドルとの裁定で商品が買われているという面も大きい。地球環境問題への意識の高まりによって生まれたバイオ燃料への需要増大による食糧の供給不足といった面も見逃せない。

これはおそろしく次のような事情による。すなわち、商品市況が高騰する際にはそれらの商品を取り扱う企業の株価上昇ピッチの方が速い。これは、ある種のレバレッジ効果が生じている可能性がある。

コモディティより資源、エネルギーファンドの成績がいいのはなぜ?

今回は「コモディティ(商品)」「資源」「エネルギー」という3つのキーワードで個別ファンドのパフォーマンスをチェックしてみることとする。いずれもいつでも自由に購入可能な追加型株式投資を対象とした。